稲葉圓成先生を憶ふ

名畑應順

稲葉圓成先生は上杉文秀師を繼ぐ天台學の權威であり、殊に支那天台はその最も得意とされる所であつた。眞宗大學時代から、本學に於ては主として天台學の講義を擔當せられ、時には叡山から懇請されて、その學院へ出講されることさへあつた。併し後年には大いに眞宗學に傾倒されるやうになり、本學に於ても數次宗典を講ぜられ、眞宗專門學校、及びその後身たる東海同朋大學に於ては、住田智見師の遺囑によつて、校長の地位にあられつゝ、眞宗學の講義に主力を用ゐられたやうである。殊に晩年には御文の研鑽と領解とが、殆ど先生の中心課題となつてゐたやうに思はれる。昭和二十二年の安居本講には、舊高倉學寮以來の先例を破つて始めて御文を講ぜられ、その講本の御文綱要は特に蓮師の念佛義に就いて發揮される所が甚だ多い。同年九月本願誌上に發表された「一宗再興の奇蹟」(一念歸命の信心について)は恐らくこの安居前後に執筆されたものであらうが、御文綱要と共に先生の御文に對する眞率な領解を感銘深く讀取ることが出來る。

眞宗學の中心問題である行信の關係に就いては、先生は丹山順藝師を祖述された住田師の說を承け、所行能信を以て一貫する簡古な說に據られたことは、御文綱要に於て覗はれ、成德院講師言行錄の卷頭に載せられた、先生の絕筆「丹山師と先生」にも明示されてゐる。行信に就いてのかゝる簡明な領解は、丹山師や住田師の如き先蹤の場合にもさうであつたやうに、却つて先生の信念を豐かに培ひ、念佛を尊ばしめることが愈々深かつたやうに思はれる。

先生は深い學殖と厚い信德を具へられると共に敎化の達人でもあり、學事行政の能者でもあつた。舊制の大谷大學に於ては、その昇格の前後から、常に學政の樞機にあつて、幾多の勞苦を重ねられ、大正十三年以來、實に七年の久しきに亘つて、佐々木、村上、稲葉(昌丸)三學長の下に、學部長、或は學監として重責に任ぜられたのである。

當時は宗門內に反動勢力が相當强く殘存し、動もすれば鬱然たる學園の興隆が宗門の傳統を破壞するもののやうに誤解され、諸種の面から大學が壓迫される傾向にあつた。先生御自身が既に宗祖の內室玉日の傳說を批判されたことから、古い信者達の間に物議を釀して、當時の宗務當路者を動かさうとしたことがあり、後、曾我、金子兩先生の問題が紛糾して、一時兩先生を學園から失はねばならないこととさへなつた。先生は學監の要職にあつて、かゝる情勢に對して深く苦慮せられ、あくまで學園の自治と研究の自由を擁護せんとせられたが、昭和六年三月遂に時の宗務當局によつて非常措置が取られ、學長の罷免、若干敎授の休職、學制の改廢等が强行され、學園は殆ど崩

壞に頻するまでに彈壓せられた。二十名の教授が蹶起して、連袂辭職し、學生一同總退學を宣したのもこの時である。先生は毅然たる態度を以て堂々の論陣を張り、宗政家の非を鳴らして、その所信を廣く江湖に愬へられると共に、學生を慰撫して、隱忍修學に從事すべきを訓えられた。當時辭職の教授組が老少共に終始統制を亂さず、結束して苦闘したのも、その主動力たりし先生の熱意に負ふ所が多大であつたやうに考へられる。

その後宗務當路者の方針も變り、學内の情勢も遷つて、辭職した教授達も追々學園に復歸し、一部は宗政方面に轉進したが、先生は何というても事件の主謀者として當局から睨まれ、彈壓の當時庶務學監であつた故梶浦眞了兄と共に、仲々學園に歸つて貰へず、昭和十二年に及んで漸く復歸されることになつた。先生の圓熟した教學體系が當時人材の乏しかつた本學の講壇に逐次精彩を加へることと期待されたが、先生はその後幾許もなく、住田師亡き後を承けて眞專の校長に任ぜられ、尋で渡米その他に由る過勞が災して發病された爲に、本學へは連續出講されることが出來ず、健康と身邊の事情が許す限りに於て、一學年に一二週間宛まとめて出講される程度となつた。昭和二十三年に大谷學長が急逝せられた時、評議員會は先生を後任學長に推薦し、出馬を懇請したけれども、先生は老病その任に耐えぬとて固辭され、遂に就任を見なかつたのは遺憾であつた。

先生はしつかりと大地に根を張つて聳え立ち、風雨を防ぎ庇蔭を布く巨木のやうな存在であつた。重厚堅實そのものであつた。平素先生に親近してゐた或知人が、曾て先生のやうにこくのある人は知らないと評するのを耳にしたことがある。それは恐らく先生の天稟にもよることであらうが、如何にも天台で鍛へ上げて、腹の出來た人としての風格を想はせるものがあつた。その先生が昭和十六年に發病された當時下さつたお手紙に、自分はこれまで後生の一大事といふことを疎かにしてゐたが、今度の病氣でそれに深く氣づかせて頂いたのは幸であるといふ旨を洩らされてあつた。このことは先生の御自坊覺順寺から近頃發行の瑩石誌上に掲載された先生の「病中の記」にも謹嚴に認められてゐる。私も當時故山で病床に伏してをり、平素物事に動じられないあの先生から、かうした率直な尊いお言葉を承つて、深く感歎すると共に、自身に取つての何よりの警策ともし、慰藉ともさせて頂いたことである。

戰時中に本學へ出講された際、確か御命日の講話をされた時であつたと思ふ。先生は若い學徒を前にして、博多の仙崖和尙の臨終の話を持出して、生死の問題を忽せにしてはならないと、慈父のやうな態度で諄々と說き訓えられたことが、はつきりと私の記憶に殘つてゐる。本山の學階銓衡會で、先生は或優秀な論文を高く評價されつゝも、最後に嚴然として、その論文が佛教學として、とかく理論に走り過ぎてゐる點を指摘され、佛教がどこまでも生死得脫を目的とするものなることを忘れてはならないと附言されたことも、私には鮮かな印象となつてゐる。

晩年の先生は病軀を押して講義にも出られ、法話にも赴かれた。何處で倒れても身許が分るやうに袂に名刺を入れてゐると

語られたこともある。令室が心配されて、先生の他行を控へられるやうに請はれると、「人間は一度は死なねばならない。何處で斃れても同じことだ」と平氣でゐられたと聞く。血壓が高くて不眠が續き、常に耳鳴りがしてならないといはれるあの病體で、よくもあんなに無造作に動いてゐられるものと驚歎させられたことである。思へば先生は全く生死を超脱してゐられたのであつた。

稻葉圓成師の渡支

諏訪義讓

先生の特異な學風や多彩な年譜に關してはそれ〴〵執筆される事になつてゐるから自分は多少關係のある渡支の實狀に就いてのみ追憶してみたいと思ふ。

先生が故國を後にして海外に出でられたのは前後四回であつたと考へる。それは三回に及ぶ渡支と昭和十五年の渡米であつた。先生の渡米はアメリカ開教四十週年記念法要のため法主台下の代理として參られたもので先生としてはその使命の光榮に感激して渡航されたものであつた。併し先生自らの內心には開教そのものの記念法要と言ふ處に渡米の衝動を覺へておられた事と推察する。その開教への關心こそ前後三回に亘る渡支の期間に於て感得されたものであつた。か樣に觀察する事は强ち自分の經驗からのみ割り出したものでなく、表面には現はされない多感な先生が心中ふかく蓄へられてゐたものであつたと信じて疑はない。

扨て先生の渡支であるが次の如き三回であつた。

第一回　大正六年七月—九月　視察

第二回　大正十一年十月—十二年八月　研究

第三回　昭和二年八月—九月　指導

この視察—研究—指導の名稱は自分が假りに附したもので、先生の渡支をかく眺むる事が出來ると思ふからである。

第一回の渡支は（七月二十四日神戸出帆）上杉文秀住田智見の兩師を奉じて上海から杭州蘇川寧波台州を訪れて遂に天台山國淸寺に參詣し、返へして普陀山天童山を巡拜し、南京九江を經て廬山を極め、武漢三鎭から北上して洛陽の龍門石窟を仰ぎ、開封天津北京と鐵路を辿つて支那北地の文物に接し、九月十三日北京の都を最後として奉天開城京城釜山を訪ひつゝ關釜連絡を以て（二十日午前）京都に安着されたのであつた。人も知る如くこの三師は師弟信友同鄕の三つ巴式の關係があり、恐らく是れ以上密接なる視察の同行者はなからう。而も三師が共に天台山と廬山をこの上もなく憧憬しつゝ渡海されたのであつた。近年住田師の舊藏から國淸寺前の記念寫眞が一葉出で來つて洋服ゲートル姿の三師を珍らしく拜見したのであつたが、今また稻葉先生の親しく記載された『支那旅行日誌』一册の中に『智者塔前に記念撮影を爲す』の一言にふれて、當時三師の覺へられた感激を新しく想像してみる事が出來た。稻葉先生の廬